



Title	ノダの本質的機能に基づく諸形式の統一的分析 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	安田, 崇裕
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12513号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/65377">http://hdl.handle.net/2115/65377</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takahiro_Yasuda_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 安 田 崇 裕

## 学位論文題名

### ノダの本質的機能に基づく諸形式の統一的分析

現代日本語の共通語には、「（する）のだ」「（する）のではない」「（する）のか」「（する）のだった」といった「ノ+コピュラ」という形態の複合辞があり、話し言葉にも書き言葉にも頻繁に出現する。論文は、これらの複合辞を一括してノダ表現とよぶ。ノダ表現は、用言の連体形を受けて文末を形成するほか、様々な用法を持っているが、ノダが無い場合（以後、非ノダ文と呼ぶ）との差が必ずしもはっきりせず、表面的な観察ではノダ表現がどのような機能を担っているのか特定しにくい。論文は、「ノダ」に共通の本質的機能が備わっているとの仮定の下、語用論的原理に従って本質的機能から多様な用法が導き出せることを示したものである。

論文は以下のように構成されている。

第Ⅰ部は、先行研究と諸用法の観察を通して、「ノダ」の本質的機能を見出し、それを定式化する。5章からなり、第1章で主要な先行研究の観点を取り上げ、第2章で形態論・統語論の検討を行う。次いで、第3章で平叙文のノダ表現の用法について語用論的な整理を行い、先行研究の観点との照合を行う。さらに第4章では疑問文のノダ表現の用法を非ノダ文と並行させて整理をおこなう。最後に、これらの観察と整理を統合して、第5章に「ノダ」の本質的機能である仮説を設定する。

仮説：ノダ表現の共通部分「ノ+コピュラ」が命題を信念（あるいは意志）として括りだすとともに、その信念あるいは意志の認知が直前の自らの判断によるものでないことを表す。

第Ⅱ部は、個々のノダ表現に対して、この仮説に基づく諸用法の導出を分析的に示すものである。第6章は平叙文のノダ表現についての分析であり、第7章は疑問文のノダ表現のものである。第8章は従属節内でのノダ表現の機能、第9章はノダ表現と認識的モダリティー形式との入れ子の内部におけるノダ表現の機能について、それぞれ分析的な説明を与えるものである。

最終章では、前4章の分析の成果を総括し、今後の展望を述べている。

第1章では、主要な先行研究の説を取り上げ、それぞれの問題点を指摘する。たとえば、説明付け説は、ノダ文が、先行発話（先行文）や文脈に存在する疑問や設定課題な

どに対する解答であることを表すとするものであるが、これには、疑問や課題が想定できないノダ文の用法（発見、確認、念押しなど）が存在するという問題点がある。

第2章では、ノダ表現の諸形式の形態・統語論的側面を論ずる。丁寧形などの文体差を捨象して、平叙文と疑問文の別、および、肯定・否定の別とル形・タ形の別の組み合わせ8種類をとりあげる。主節末以外のノダの形態については、第8章と第9章での議論に資する統語的事実の指摘のみを行っている。

第3章は平叙文ノダ表現の観察・整理と先行研究との照合である。

平叙文ノダ表現は、「信念用法」と「当為用法」に分かれる。信念用法はさらに「受け止める」用法と「伝える」用法に下位分類される。肯定ル形のノダ文の信念用法には、述べる内容（命題）が既定の事実である（「事実の既定性」）という必要条件がある。その上で、“反論や再考を抑制するという態度”を表明したい場合か、「説明付け」や「感情の惹起」を表現したい場合にノダ表現が選ばれる。

否定ル形のノデハナイ文は、命題が「誤った信念」であるとして却下することを表明する。肯定タ形のノダッタ文は、「過去に話し手が認識していたこと」を思い出し、現在も同様に信じていることを、否定タ形のノデハナカッタ文は、過去から存在していた「誤った信念」を却下することを表明する。

第4章は、主に非ノダ疑問文との対比によって、疑問文ノダ表現の用法を観察・整理する。疑問文ノダ表現はすべて、非ノダでは示せない「説明付け」や「感情の惹起」の解釈を許す。このことは平叙文のノダ表現にも見られるものであり、ノダの本質的機能から生ずるものと考えられる。

第5章では、前章までの観察を敷衍して、ノダの本質的機能がどのようなものであるかを論ずる。

統語論的ふるまいから、信念用法のノダの内容は信念や意志といった認識レベルであることが分かる。非ノダ表現であればこのレベルでそれに話し手の発話時点の判断が加わるのであるが、ノダ表現ではそれが避けられる。つまり、信念あるいは意志の認知が発話時点の自らの判断によるものでないことを表す働き（D\*と記す）をしているとする。この機能は、「判断の既定説」などの先行の諸説が設定するノダの命題内容に対する働きを弱めたものになっていて、先行研究での周辺の取り扱いあるいは例外としての除外を救うことができる。

さらに、このノダの弱い高次表意は、「内向き」の推意によって「事実の既定性」や「反論や再考の抑制」の解釈を可能にし、また「外向き」の推意によって「説明付け」や「感情の惹起」の解釈を可能にするという具合に、ノダ表現の多様な用法の導出を説明することができる。

第II部は各論である。第6章では、D\*と肯定否定、ル形タ形の組み合わせの形式化を行い、平叙文における信念用法と当為用法のそれぞれについて、基本表意と高次表意および推意が何であるかを明確にした。第7章では、ノダ疑問文が未判断の命題を基本

表意として提示するとともに、高次表意としてその命題が話し手の発話時点の判断に帰さないことを表明すると定式化したうえで、平叙文と並行する形式化を行う。この2章によって、たとえば、「感情の惹起」用法がなぜ平叙否定の NODA にのみ見られないかなどほとんどの制限を説明することができる。

第8章では、従属節内でのノダ表現の意味の差異を D\*と接続助詞の機能との相互作用として説明し、第9章では、認識レベルの高次表意が入れ子になる場合の D\*と認識的モダリティーとの相互作用を形式化することで、個々の表現の意味解釈の導出を説明する。広く知られていたノダの分布の偏りを説明できるだけでなく、第9章では、内側の高次表意が命題に組み入れられて命題化するケースがあることが示される。

上記仮説は、先行研究が部分的に成功していたノダの性質・機能の分析について、推意部分を一旦取り外したうえで、高次表意として取りだせる共通部分となっている。そして、否定・タ形・疑問・接続助詞・認識的モダリティーとの統語的な結合によって、表面的には共通性を見出せなくなっているほどに多様なノダ表現の意味を構成的に解釈する道筋を見出した。